

第1部 エッセイ

テーマ「おばあちゃんの手料理とごはん」

一般の部

佳作

おばあちゃんのコロッケ

大村香苗

昭和四八年、オイルショックが日本を襲った年、私は中学二年生だった。その年の秋の夕暮れ、長く寝付いていた祖母が、珍しく床から起きだして台所に入ってきた。髪をきちんと結び、真っ白なアイロンのあたたった割烹着をさつと私の前で羽織った。祖母は、

「晩御飯はなにが食べたい？」と、私に訊いた。

私は迷わず答えた。

「コロッケ！ おばあちゃんのコロッケが食べたい！」

祖母のコロッケが大好きだった。前の晩から牛筋をコトコト煮た小判形のコロッケは、手間がものすごくかかる。そんなコロッケは、祖母の具合が悪くなつてからは、食卓から姿を消した。だから、「晩御飯はなにが食べたい？」なんて聞かれたら、もう小躍りして、私は迷わずに答えたのだった。

祖母は、手際よくコロッケを作った。大きな油の入った鉄鍋のなかに、慎重に滑り込ませる。ジュツという音が聞こえる。パン粉と油の香ばしい匂いが辺りに漂う。菜箸で、さつと油から小判が引き上げられた。余分な油を切り、黄金色に揚げられ小判がお皿に盛りつけられた。私は、わくわくしながら、口に含んだ。けれど、その味は、なにかがいつもと違った。なぜなら、祖母のコロッケは前の晩からの仕込みが必要だったから。にか仕立てでは本来の味がでない。いつもよりあつさりしていた。それでも「おいしい、おいしい」と言いながら、コロッケ四個と山盛りのご飯をたいらげた。

これが、祖母の最後の手料理となった。自分に時間がないことを感じていたのだろうか。それか

ら少しして、祖母は入院した。秋も深まった頃、そのまま旅立ってしまった。

次の年の晩秋、祖父がお惣菜コロッケを買って、祖母の仏壇に供えていた。明治生まれの気丈な祖父の背中を蠟燭の灯がゆらゆらと照らしていたのを覚えている。